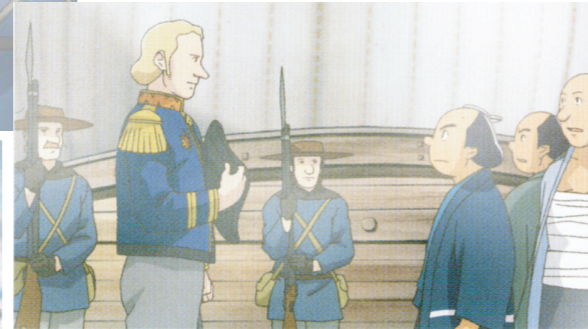




捕まえられたゴローニンたちが無事かどうかを確かめようとして、今度はクナシリ島近くを偶然、航海していた嘉兵衛がロシア船に捕まり、カムチャッカにつれて行かれました。  
嘉兵衛は44才でした。



しかし、嘉兵衛は捕らわれの身にもかかわらず、おたがいの誤解をとくために、ロシア側の交渉相手リコルドと誠意をもって話し合い、ついに二人は、ゴローニンたちを釈放させることに成功しました。



ロシア船が日本を出発する時、乗組員たちは、嘉兵衛に感謝して大きな声で「ウラー（ばんざい）、タイショー！」と三度叫びました

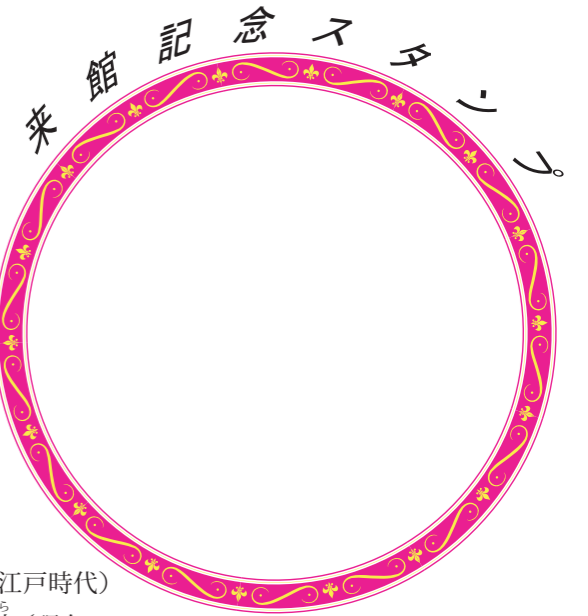


ゴローニン事件でつかれはてた嘉兵衛は、50才で弟たちに店をゆずり、ふるさとの淡路島へもどりました。ふるさとでも、港を新しくしたり道路や橋をつくったりして、ふるさとの発展のために努力しました。  
59才、都志の自宅でなくなりました。



〔嘉兵衛の海〕(c) 2005 クニ・トシロウ / 動画工房  
発行：高田屋顕彰館・歴史文化資料館〔菜の花ホール〕  
<http://www.takataya.jp/nanohana/nanohana.htm>

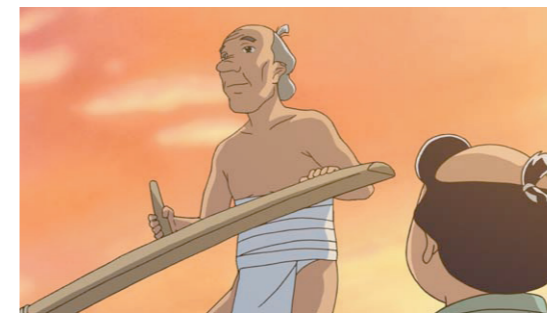
# たかたやかへえ 高田屋嘉兵衛ものがたり



高田屋嘉兵衛は、今から約240年前、(江戸時代)1769年正月(旧暦)に淡路島の都志本村(現在の洲本市五色町)で生まれました。貧しい農家の6人兄弟の長男でした。当時の名前は菊弥でした。

## いつかこの海で、こーんな大きな船を乗り回したいんじゃ！

嘉兵衛は海の好きな子でした。都志川に木ぎれで作った船をうかべて遊んだり、河口近くの水面が、同じ時刻でも高さが違うことに気づき、潮の満ち引きを調べて、大人たちをおどろかせたという言い伝えが、今も地元で語りつがれています。



13才になった嘉兵衛は、親戚の弥右衛門方で漁業を、さらに和田屋喜十郎方で商売の手伝いをしました。

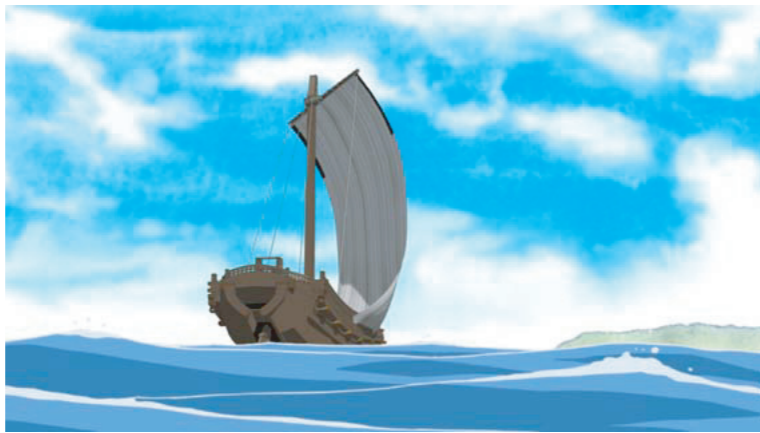




## 兵庫に出る

嘉兵衛は希望に胸をふくらませ、22才で兵庫（今の神戸市）に出て、兵庫から江戸（今の東京）へお酒を運ぶ船（樽廻船）の船乗りになりました。  
まもなく恋人だった新在家の網元※の娘「ふさ」が兵庫に出てきて、二人は結婚しました。

※船や網をもって、たくさんの漁師の代表をする人



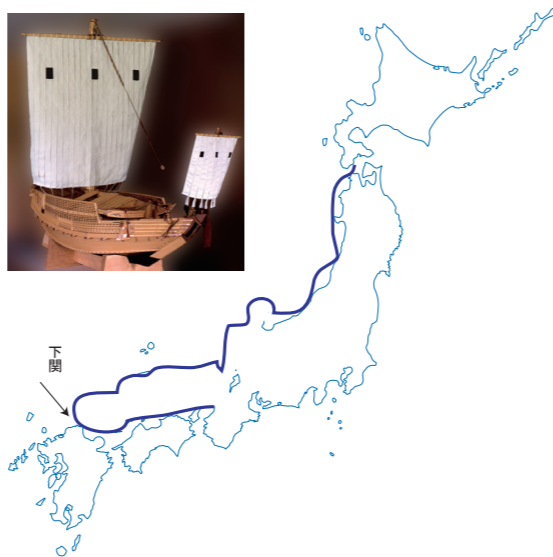
## 辰悦丸できる

28才の時、嘉兵衛のはじめての船、辰悦丸が完成しました。この船は1500石積みで、その時代に作られたもっとも大きな船でした。その船で函館へ行き、各地の商品を船で運ぶ商売を始めました。



## 函館での活躍

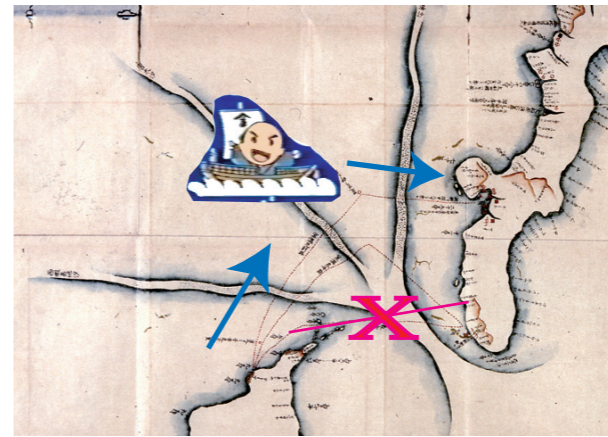
30才の時、函館に自分の店を開きました。  
北海道からは、主にニシンやイワシといった当時肥料として使った魚、鮭やこんぶなどの海産物を集めて、大阪などに運びました。  
大阪から北海道へは米や酒、塩、木綿などの生活に必要な品を運び、商売はしだいに大きくなりました。お店の倉もふえて、一人前の船頭、商売人になりました。



### 北前船とは

辰悦丸のような船を北前船と呼びます。

江戸時代の大坂の港は、全国からいろんな産物が集まり、「天下の台所」と呼ばれました。その大坂を出発点として、瀬戸内海を通り下関、そして日本海の港を点々と結びながら、北海道まで航海しました。

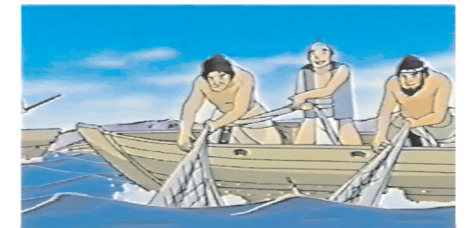


## ほっほう かいたく 北方の開拓

31才の時、幕府の役人、近藤重蔵の依頼を受けて、蝦夷地（北海道）の北にあるエトロフ島と、クナシリ島の間を小さな船でも渡れるように、新しい航路をみつけました。



そして、その島に住んでいたアイヌの人たちに網を使った魚のとり方を教え、魚の肥料や干物を作る加工場をつくりました。  
また、エトロフ島に17ヶ所の漁場を開きました。



嘉兵衛が38才の時、函館に大きな火事がありました。  
高田屋の店も被害を受けましたが、嘉兵衛は私財（自分のお金）を使って、被災者にお米やお金を与えるなど、救援活動をおこないました。



## ロシアとの交しょう

嘉兵衛が蝦夷地で活躍している時、通商※を求めるロシアとそれを断った日本との間で、もめごとがありました。ロシアが日本に戦争をしかけてくるのではないかと、日本では考えました。そんな時に地理の調査のとちゅうにクナシリ島に上陸したロシア人の船長ゴローニンとその部下7人を、日本の警備隊が捕まえてしまいます。

※国と国とをこえて、おたがいに商売すること。

